

with orang-utans in lower Kinabatangan, Sabah, Malaysia. *Animal Conservation* 7 (4) : 375-385. 4) Nietlisbach P., Arora N., Nater A., Goossens B., van Schaik C.P., Krützen M. (2012) Heavily male-biased long-distance dispersal of orang-utans (genus : *Pongo*), as revealed by Y-chromosomal and mitochondrial genetic markers. *Molecular Ecology* 21 (13) : 3173-3186. 5) 久世濃子 (2013) オランウータンってどんなヒト? (あさがく選書). 朝日学生新聞社 6) Felton AM, Engströma LM, Felton A, Knott CD. 2003. Orangutan population density, forest

structure and fruit availability in hand-logged and unlogged peat swamp forests in West Kalimantan, Indonesia. *Biological Conservation* 114 : 91-101. 7) Meijaard E., Albar G., Nardiyono, Rayadin Y., Ancrenaz M., Spehar S. (2010) Unexpected ecological resilience in Bornean Orangutans and implications for pulp and paper plantation Management. *PLoS ONE* 5 (9) : e12813. 8) 久世濃子 (2004) マレーシア・サバ州におけるオランウータンの調査と保護の現状. 霊長類研究 20 巻 pp. 77-80

📖 図書紹介

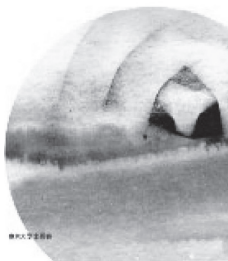
東京大学アジア生物資源環境研究センター 編
2013.

アジアの生物資源環境学 持続可能な社会をめざして

東京大学出版会

アジアの生物資源環境学

持続可能な社会を築くために
東京大学アジア生物資源環境研究センター



同書の序章の定義によると、「生物資源環境学」とは、生物資源と環境の学である。生物資源学でも、資源環境学でも、生物環境学でもない。生物資源は、生物のもつ資源的な側面をとらえた言葉であり、再生可能であるという特徴をもつ。生物資源の生産は

農業、林業、養殖漁業などによって担われており、それらが営まれる場所の自然環境や社会経済環境の影響を受けている。また生物資源を利用する活動は、多かれ少なかれ、良かれ悪かれ、環境に影響を与える。生物資源環境学は、生物資源生産が営まれる場所としての問題と、生物資源の利用が引き起こす環境の問題を扱う学問分野であり、その研究対象は多岐にわたる。

本書では途上国の僻地で暮らす人々の能力向上から、作物の遺伝子解析まで、分野の異なる幅広い話題が、3部12章構成にて提供されている。森林や林業に直接関係する章もあれば、まったく関係なさそうな章もある。それぞれの章は独立性が高いため、「生物資源環境学」という名に違和感を覚える人も、自分が興味を持つ章のみを読むことで、得るものはあるだろう。その一方、自分自身の専門外の章にも目を通すことで、アジア地域の生物資源の持続的生産について、新しい考えを持つことができるだろう。視野を広げるために、斜め読みでも全章に目を通していただきたい一冊である。

(藤間 剛)